



菊池省三先生来校

11月17日、NHKの「プロフェッショナル」や日本テレビの「世界一受けたい授業」にも現役教師として出演した全国的に著名な菊池省三先生が来校され、特別授業をしてくださいました。はじめて出会った生徒たちをすぐに惹きつけて、みんなが笑顔になりながら、仲間と関わり合い、意見を伝え合う授業が展開されました。2年B組の授業では、まず「教室の空気感って大事ですよ」と「指の骨の折れるくらいの拍手」や「隣の人にマスクの下は笑顔か聞こう」などを伝えながら、軽妙なやりとりとスピード感で、すぐに柔らかな空気になっていきました。「違い」は「自分らしさ」と「ひとりひとり違っていい」んだよねと安心して授業に向かえる雰囲気をつくってくれました。

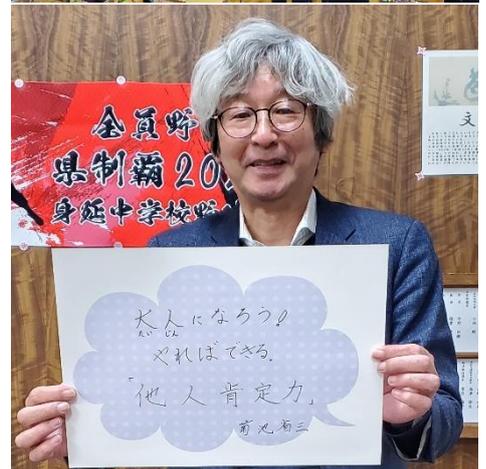
授業の内容は、着飾った華やかな「成人式」の写真。大人になる式。大人を別の読み方で「たいじん」と読む。成人式に小中学生が演奏に来たが「もう来年は出たくない」と。なぜ？成人式の参加者が聞く態度が悪かったからだ。そういう人は大人かな？一方、宅配業者で働く青年が仕事で都合がつかないが上司に促され、仕事着のまま参加した。その青年は小中学生の音楽を真剣に聴き、温かい拍手をしていた。最後の記念写真撮影で受付の方に「こんな服装なので入らず失礼します」と言った時、一部始終を見ていた受付の方が言った言葉。「何言ってるのよ。あなたが一番かっこいいです」かっこいいと言ったのはどんな思いか？「目的や場に合った態度を取っている」「自分の仕事に責任を持っている」「思いやりの気持ちがある」生徒たちがコミュニケーションを取る中で表された言葉を伝えながら、年齢の大人（おとな）ではなく、こういうことができる人を大人（たいじん）と言う。

自分の考えを自信を持って伝えること、意見の違いを認め合うこと、人との交流の中で自分の考えもつくられていくこと、そういったコミュニケーションの大切さを伝えていただきながら、たくさんほめて認めていただき、教室がどんどん温かい空気になっていきました。

午後からは3年生学年合同授業を体育館で行いました。芸人でプロ野球にも入った高岸さんを題材にした授業でした。同じく、雰囲気をつくっていたきながら、「やればできる」「他人肯定力」ということを、これから新しい世界に巣立っていく3年生にメッセージをいただきました。そしてそれは身延中学校の3年生がこれまで成長して創り上げてきたものでもあると。

先生たちも授業から、その後の講演から、たくさんのことを学びました。全国を回っていただいている先生から、授業を見ていただいた1年A組の様子も含めて、身延中学校の生徒の空気感をほめられたのもうれしかったです。

菊池省三日めくりカレンダーを玄関に飾りました。「生長ではなく成長を」という言葉もあり、学校生活を通しての熱いメッセージ、有用な言葉が続きます。身延中の生徒がどんな成長をしてくれるか楽しみです。



9

価値ある
無理をしよう



無理だと思っ
てから先の
努力が、
成長に結
びつづ
くのです。

交通安全標語 のぼり旗を設置

P T A環境安全部で企画し、生徒会の生活委員会が全校に標語を募集して、交通安全への意識を高めようと「のぼり旗」を制作しました。全校生徒の標語を各クラスから4点ずつ選び、全校生徒が投票して次の上位3点を旗にしました。

大丈夫！ そんな油断が 事故を呼ぶ (渡邊夢以)
 その運転 多くの未来を 乗せている (望月柚伽)
 一瞬の 甘えと油断 命取り (樋口多葉紗)

P T Aから旗をいただき、生活委員会で校舎への道に設置しました。意識していただき、安全な通行にご協力ください。



1位 3B 篠原佑芽



2位 2A 望月 礼



3位 3B 遠藤爽夏

POPコンテスト

一人一人のお薦めの本を紹介するPOPづくりを行い、それぞれ味のある、思いのこもった作品がそろいました。全員の投票で上位16点を県のコンテストに出品しました。読んでみたいなという本がみんな増えたと思います。

小野先生賞
堀内唯加



校長先生賞
幡野彩音

入賞者 青柳璃子・氏原みのり・佐野有和・望月柚伽・小林 翼・鈴木隆太・依田愛里・青柳 快・片田 蓮・高野美波・馬場結月



「戦争について」

僕には、もう亡くなっているが甲府空襲を体験した祖母がいる。その時、祖母は四歳。母親、妹、弟と疎開していたおばとその子供と一緒に逃げたそう。途中、おばとその子供が忘れ物をしたとあって、家に引き返した。待ち合わせの場所にこないおばを心配し、祖母の母、妹、弟は祖母を一人橋のたもとに残し、家に引き返すことに。橋には大勢の人が行きかう。「この子はどの子か」と声をかけてくれる人もいるが、みんな逃げるのに生きるのに必死。祖母はふるえながら、母親達の戻ってくるのを待っていたそう。戻ってきた母親が念仏を唱えているのを見て、おばとその子供が亡くなったと思ったそう。家は全焼。もちろん祖母の家だけでなく、辺り一帯、すべて見通せるほど。しばらく知り合いの家に身を寄せ、手作りの家を見て、電気のない生活。学校は青空学級、家での勉強は日が暮れるまで家の外で。もし亡くなったのがおばではなく祖母だったら、僕は今、存在していないことになる。

家が急になくなるって、どんな気持ちなんだろう。戦争がずっとある、戦後を体験するってどうなんだろう。最近、過去のこととしか思っていない戦争を身近に考えるようになった。二月にロシアがウクライナに侵攻し、五ヶ月たった今も終わるところか、その影響が世界に広がっているから。ウクライナの生き地獄のような日々をニュースで見ていると、そのうち僕の住んでいる、このどかな町にも同じことが起きるのではないかと不安になる。戦争をするつもりがなくても、何か理不尽な理由で侵攻されることがあるんだということを今回のことで痛く感じる。来年、僕は修学旅行で広島を訪れる。世の中から、悲惨な出来事がなくなる手がかりを見つけることができるだろうか。僕には一体、何が出来るだろう。

居間から外を見ると、いつもと何ら変わらない風が吹き、セミが鳴き、すずめがさえずり、カエルが窓にくっついていて。コンビニまで歩いて一時間はかかる、自然いっぱいこの景色が十年後に焼け野原になっていないよう、今の僕に出来る、知識と想像力と勉強を頑張っていきたいと思う。そして、自分の考えを発信していきたいと思う。

若林伸之介

「青少年を育む日」の作文です。世界中で多くの人が心を痛めていても変えられない現状、どうしようもないと思ってしまいます。だんだん自分事じゃないという雰囲気も感じています。でもこうやって自分に問い続けること、今できることをやろうとすること、こういう思いを持つ若者がいて、その思いを表してくれる。未来は明るい心強く思います。平和。校舎から見える、青空に映える紅葉する木々、校庭を走り回る生徒たち、当たり前にある光景こそ…。